

解放空間

微細な変化の蓄積

指導教員 吉松秀樹教授 印

9AEB2120 玉江将之

1. 問題意識「よごれる」とは

泥だらけになりながら部活をやっていた時、がむしゃらによごれることで、普段押さえ込んでいる自分の中の感情が“解放”され、自分の居場所はここだと感じていた。よごれることでなぜこのように感じたのだろうか (fig.1).



fig.1

2. 縛り

人は他者からの視線を気にする。それは、大多数の人が自身を他者に対して良く見せようとするからだろう。このことから、他者の視線によって身体の行動が縛られてくる (fig.2).

例えば・・・



fig.2

3. 縛りからの解放

大通りを歩いている時、立ち並ぶビル群の圧迫感、他者の視線、自動車などの騒音が自身の身体を縛っているように感じた。だが、ふと脇道にそれた時、建物の圧迫感は無くなり、人通りは減り、騒音が聞こえなくなり、解放された感じがした (fig.3)(fig.4).



fig.3

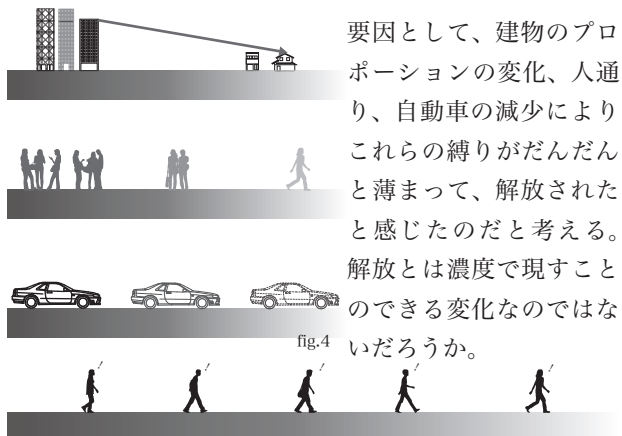


fig.4

要因として、建物のプロポーションの変化、人通り、自動車の減少によりこれらの縛りがだんだんと薄まって、解放されたと感じたのだと考える。解放とは濃度で現すことのできる変化なのではないだろうか。

どの瞬間人が、解放を感じるかは、さまざまだが少しずつ変化が積み重なっていくことで、解放を感じる瞬間があるのではないだろうかと考える。

4. 解放を感じる空間

壁面の厚みにより多方向に広がった開口と多彩な色で作られたガラス窓、荒っぽい壁面の素材感は、光を拡散させる。拡散された光が空間を包みこみ、視線が光に集中した時、空間の距離感があいまいになり視覚に狂いが生じ周囲の視線を気にしなくなる。そして、解放を感じるのではないだろうか (fig.5).

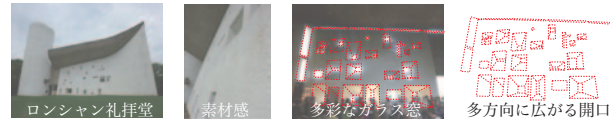


fig.5

5. 外部からの流れを感じる小さな図書館

先の二つの要素（濃度の変化、拡散する光）を用いて外部から内部が連続する小さな図書館を提案する。人それぞれ解放を感じる瞬間は違うため、空間に微細な変化を加えていき、訪れた人が変化の蓄積によって解放を感じる空間を設計する。時の流れ、人の変化によって使われ方も変化していくものとする (fig.6)(fig.7).

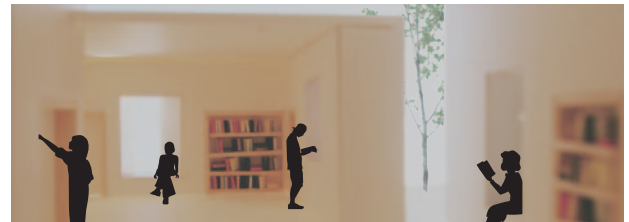
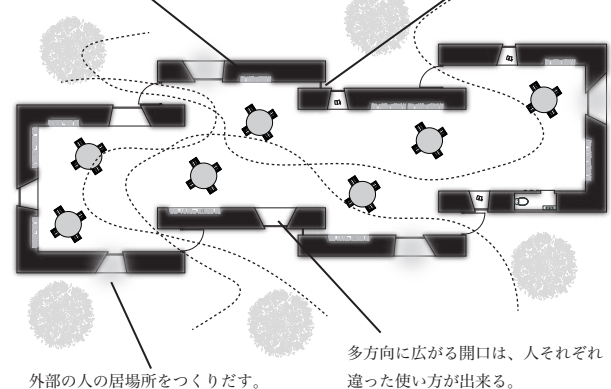


fig.6

壁を厚くすることで視覚を狂わせる。ボリュームのずれによって空間を変化させる。



外部の人の居場所をつくりだす。

多方向に広がる開口は、人それぞれ違った使い方が出来る。

fig.7

